



1982-11

No.170

【表紙】

京都国立博物館本館

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

「豊かさ」と文化活動

飯田 経夫 4

随想 世界文化政策会議に出席して

石井 米雄 7

報告

全国高等学校

総合文化祭に参加して 坂本 光明 10

文化財建造物修理用資材

需給等実態調査について 長谷川良夫 14

文化庁ニュース

昭和57年度文化勲章受章者、文化功労者決定	17
昭和57年秋の褒章受章者決まる	18
昭和57年秋の勲章受章者決まる	18
文化振興会議開催さる	19
昭和57年度都道府県宗教法人事務担当職員 研修会の開催	20
文化庁企画・提供「美をもとめて」の放送予定	20
昭和57年度文化財愛護全国研究集会	21
史跡の指定等	21

展覧会

ベルギー象徴派展	23
ジョージ・シーガル展	24
特別陳列 大分 長安寺の銅板経	25
鉄 斎	26

国語シリーズ⑱「漢字の画数」に関する問題 29

伝統芸能への招待⑦ 27 歌舞伎——その特色と魅力——	国立劇場ニュース 31 宮島のだんまり ほか
--------------------------------	---------------------------

文化財建造物修理用資材 需給等実態調査について

文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官

長谷川 良夫

一 はじめに

近年の社会状況の急激な変化は、伝統的技術伝承の土台となる資材の入手難等、文化財建造物の修理を実施して行くうえにも、さまざまな影響を及ぼしている。

文化庁では文化財建造物保存事業の円滑な運営を図るため、特に建造物修理に必要な材料のうち、産出量の激減等に伴って、入手が困難となっている伝統的な材料について、年次計画に基づき、順次その需給等の実態調査を実施してきた。

昭和五十一年度（第一期）は、檜、漆、茅、檜皮などの植物性材料、五十三、五十五年（第二期）は粘土類（瓦、煉瓦、叩き土、壁土）、石灰類（消石灰、貝灰）、左官材としての（のり）、石材等の鉱物性材料、五十六、五十七年度（第三期）は和紙の調査を行っている。（別紙参照）

調査の内容は「生産に係る地域の現状及び数量に関すること」、「地域及び生産方法の別



岐阜県白川村の茅場（13,000㎡の広さがある）と保管庫

よる材料の品質の差異に関すること」、「調査結果の分析に関すること」などで、学識経験者を調査員に委嘱し、産地の現状調査等を行なったものである。

二 調査結果について

（一）植物性材料

植物性材料については五十三年度に詳細な結果の報告書が刊行されているのでここでは省略するが、調査の結果をうけて、屋根葺材料としての茅場の造成、保管庫建設等を補助事業としてとりあげるなどの実効対策を実施に移すことができた。そのほか檜皮についても立木から良材を得るため、先ず重文所有者の持山、境内林等から檜皮を採取すべく協力を呼び掛けるなど、実施可能なものから逐次その確保について実行に移している。

（二）鉱物性材料

イ 瓦 瓦については、最近の都市開発の進行に伴う原土の採取難。生産工程の機械化に伴い凍害を受け易い瓦が出来るなど品質の変

文化財建造物修理用資材需給等実態調査（第三期）年次計画表（調査対象地域）

年度 調査事項	昭和56年度	昭和57年度
換紙・鳥の子等	福井県今立町（越前紙） 滋賀県大津市（近江鳥の子）	福岡県八女市（八女紙） 兵庫県西宮市（間合紙） 埼玉県小川町（細川紙）
障子紙等	岐阜県美濃市（美濃紙） 長野県飯山市（内山紙）	島根県三隅町（石州半紙）
その他	茨城県山方町（西の内紙） 栃木県烏山町（程村紙）	高知県伊野町（土佐紙） 愛媛県川之江市（伊予紙）

修理用資材需給等実態調査（第二期）年次計画表（調査対象地域）

年度 調査対象範囲	昭和53年度	昭和54年度	昭和55年度
粘土類	新潟、愛知（三州）、奈良、京都 兵庫、島根、岡山、愛媛（菊間）、長崎 （兵庫）、長崎		（大阪）煉瓦
石灰類	消石灰 貝灰	栃木、埼玉、岐阜、高知 千葉、広島、高知、長崎 佐賀、熊本	
左官材料	のり	北海道、宮城	
石材等			岩手、宮城（天然スレート） 栃木、静岡（凝灰岩）（安山岩） 長崎、熊本（凝灰岩）（砂岩） 北海道（凝灰岩） 福井、岐阜（凝灰岩）（安山岩）

化。地方色の問題。伝統的いふし瓦の製造が減少して行く傾向にあること。手作りを必要とする鬼瓦、軒瓦等の役瓦の製作技術者の後継者養成等に対してなど、その有効な手を打つ必要のあることが指摘されている。

ロ 左官材料 漆喰塗壁に必要な消石灰、貝灰については、製造工程の近代化に伴う大量生産方式による品質に問題があり、施工後の亀裂の発生防止、耐久性の保持のため適度の粒度分布、保水性等が必要で、伝統的な製法による材料を必要とする文化財建造物修理に不適な製品となっていることが指摘された。

一方、在来の製造手段によっている製造所もあり、消石灰では栃木県、高知県、貝灰では香川県、熊本県等に於て僅かながら生産が続けられている。しかし製造所附近の都市化により移転が迫られていたり、後継者の確保が難しい等、その助成について早急な対策が必要と思われる。

ハ のり 貝灰、消石灰とともに漆喰壁に必要な「のり」としての「ぎんなんそう」「つものまた」は、北海道等の産地の海には十分あるに拘らず、「化学のり」の普及によって最近では「のり」としての出荷が少なくなり、食品など別の用途に用いられている。海産物であるので採集時期（五、六月）の前に発注して、労力に見合った収入があれば、良質の材料が供給されることがわかった。

二 叩き土については、かつては民家の土間などに一般的に用いられた工法であるが、現

在では文化財建造物の修理以外では全く需要がなく、市場性のあるものでない。しかも本来手近な土を用いて施工していたものであるから、地方によって使用する土の種類や、砂、苦汁等を混合する割合、工法等が異なり、現在では高令な棟梁級の人でなければ施工出来ず、早急に正確な記録をとり、後継者の養成を行う等、技術の把握と伝承が、必要である。

ホ 壁土は特に上塗用の土物壁材料が問題で、聚楽土、錆土、白土等は桃山時代以降に京都を中心とする近畿地方の茶室等に使われて発達したものである。聚楽土は茶褐色の色土で現在まで和風住宅等に最も普及してきた上塗専用土だが、本場物は京都市中心部の地下二メートル以下の層に埋蔵されている。特に第二次大戦後は市街化によって次第に採掘困難となり、現在では計画的な採掘は全く不可能になっている。僅かに下水道とかビル工事の際に便乗して偶発的に採取されているのみで、将来とも多くを期待することは出来ない。五十四年度に採掘された量は二百キログラム程度で一〇〇平方メートルの壁の仕上げ量にも充たない量である。

錆土についてはかつて大阪天王寺附近で得られたものであるが、土そのものの存在すら忘れられている。これら本場ものに代わるものとして京都大亀谷地区のものが色調等似ているが、これは水こねした場合、施工性、耐久性に劣るものである。文化財建造物用として

本場物を確保するためには、埋蔵推定地区を指定するなど思い切った対策が必要であろう。白土は滋賀県産のものを最高とし「江州白」の別名があり、大津壁の名称もこの土を用いた壁に付けられたものである。現在では蒲生郡竜王町の山地に埋蔵されていることが知られているが需要の減少したことで、砂防ダムの関係で採掘は十年程前から行われていない。これらの上塗の土物壁材料は若干の加工が必要である。聚楽土などは、児頭大の塊にして天日により乾燥され、搗き砕いて粉体とする。粉砕には機械（ミル）によるよりも、旧来の白と杵によるものの方が施工上、耐久上良いとされている。この旧来の方法で加工しているものはすでに一社のみとなっており、保護育成が必要と思われる。

各種新建材の開発が進んでいる現在、普通の建築物に対する旧来の日本壁の適用は激減し、将来それが復活するとは業界でも思っていないので縮小の方向にある。このままの状態を放置すればやがては文化財の修理でも色土の入手はますます困難となることが指摘されている。

へ 石材については、明治洋風建築にもよく使われた笏谷石、大谷石、伊豆石等の凝灰石について資源の減少が認められる。笏谷石の産地は、福井市の東郊外に当たる小山谷を中心に集中している。笏谷石は採掘の歴史も古く、丸岡城の天守の石瓦を初め文化財建造物にも広く用いられている。しかし、現在では地表

での採掘は終り、地下九十メートルのトンネルで採掘が行われている。栃木県の大谷石は一部は地表でも採掘が行われているが、大半は地下三十メートルから八十メートルにわたって採掘されている。

この両者とも地下深い所での作業であるため作業環境は悪いが、差し当たって埋蔵量には不安はない、しかし長期的には問題がある。

伊豆石については、かつて伊豆半島西部の長岡から江間地区を中心に多く産出され、江間石、田之洞石、本目石等と称された。重要文化財建造物の久能山東照宮の基壇石、石柵などにも使われている。しかし、現在ではこれらの、昔は普通に使われていた特等品級の石材はすでに採掘し尽くされ、現在では色調、石質ともに劣る三等品以下になってしまったのである。これら文化財の修理には、色調、石質の似ている大谷石又は笏谷石に代替する他はない。

天然スレートについては、岩手県陸前高田市及び宮城県桃井郡雄勝町に産出する。明治洋風建築等の屋根葺材として一時期は多く用いられた。しかし寒冷地での凍害による割れが起るなど屋根葺材として疑問視する向きもあって、需用が途絶えていたが今回の調査で資源の見通しもあり、また耐寒、耐久性にも優れていることも確認された。問題はむしろ葺き方とか、石の選び方に問題があり、熟練した葺工による施工が必要なことである。後継技術者の確保の意味からも、その需用を永

続させることが先決で、重要文化財旧米沢高等工業学校本館の屋根を始め、幾つかの文化財修理事業でこの天然スレートを使用した復原が行われた。

安山岩等、石垣基礎等に使用する間知石、角材等硬い石についての問題点は、安価なコンクリートブロックにおおされて使用されなくなりつつあり、かつてのこれらの石材採取業者は割栗石等の碎石業者に変わっているものが多く、大材を採るのに必要な鑿、槌を使った伝統的手法の石工の後継者が絶えてしまう恐れがある。この後継者の問題については特に加工段階では凝灰岩についても同様で、今回の調査で各調査員の一致した報告となっている。

一期から二期までの調査を通して、これら文化財建造物の修理用資材については、社会状況全般の急激な変化に伴い、急速にその需用が失われつつあることが浮き彫りにされたわけである。これらの伝統的材料は、その採取方法、技術など我々の祖先が永い間かかって磨き上げて来たもので、建築材料としては現在の目で見ても優れたものである。しかし一度、その伝統が絶えてしまうとその復活は容易でなく、これらの材料なしでは文化財の本来の意味での修理は出来ないことになり、その対策が早急に望まれる次第である。

○大きな特色は、選択性、文化の自由度、幅の広さにある。『古語拾遺』豊かさと文化活動について名古屋大学、飯田文庫の専門家は経済学ですが、今回は文化の問題について貴重な御意見をいただきました。

今夏「メキシコシティで世界文化政策会議が開催された」と。この会議の概要、メキシコ宣言については、九月号で紹介しましたが、今月号では、我が国代表団の一員として活躍なさった井原大教授に、会議の模様を描き写していただくつもりです。会議の雰囲気が生々しく伝ってくるようです。

全国高等学校総合文化祭でも今年には教育会を迎えますが、本誌では以前には教育委員会の立場から執筆して、今年号では先立の文藝から、宇都宮高松本校に全国の先生方からつづりて執筆をお願いしました。

今年には、寒さのおとずれが早いような気がします。御健康を祈ります。

(W)

広告の問合せ・申込み先
 株式会社 ギョウセイ 営業課
 TEL(〇三)二六八一二一四一(代表)

昭和57年11月25日印刷・発行
編集文化庁
(通巻第一七〇号)

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい
本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所 〒106 東京都新宿区西五軒町52番地
電話 (〇三) 二六八二二四一 (代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 (株)行政学会印刷所

— 31 —